

ISSN 2434-9690

東アジア国際 言語研究

創刊号

東アジア国際言語学会
2020年1月

目次

ごあいさつ	鈴木康之 (i)
[特別寄稿]	
文の材料としての単語と連語	鈴木康之 (1)
名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語	早津恵美子 (5)
[対照研究]	
構造で作る派生空間詞	高橋弥守彦 (25)
日本語の「を格」、「から格」の空間名詞と自動詞との組合せに対応する台閩語の 連語との比較	施 淑恵 (36)
「ノニ」文と中国語“关联词”訳の対照研究	孫 宇雷 (51)
「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析——日中の結果複合動詞を中心に——	蘇 丹 (61)
「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究 — 対訳における 意味伝達と形式選択から—	曹 銀閣 (72)
「飛び+V」と“跳/飞+V”についての一考察	陳 雄洪 (82)
拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究—「精神」を例として—	梁 鵬飛 (92)
[日本語研究]	
不可能形式による禁止表現	李 楠 (103)
コーパスに基づく類義語の意味分析の研究—「はがれる、むける」などを中心に—	李 響 (111)
日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察	鄧 超群 (121)
新聞社説における譲歩表現に関する分析—その談話機能を中心に—	単 艾婷 (131)
日本語の「内の関係」連体修飾節のモダリティについての考察	張 静苑 (142)
類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性	魯 美玲 (153)
『萬葉集』にみられるオノマトペ—AB型を中心に(その式)—	王 則堯 (164)
[中国語研究]	
中国語の仮定複文における前後節の関係標識について	新田小雨子 (174)
時量詞構文における焦点について	福本陽介 (184)
歴史的に見た離合詞—“请客”“生气”“见面”—	石井宏明 (195)
小説の地の文における“SV了O”文の成立条件	白石裕一 (205)
現代中国語の数量詞について	洪 安瀾 (218)
“把”構文における可能表現についての再考	小路口ゆみ (229)
位置移動の動詞“过”のスキーマについて	蘇 秋韵 (239)
二空間の質的対立から見た“过”の通過義について—「境界プロフィール」と 「場所プロフィール」に着目して—	佐々木俊雄 (250)
清末北京語動詞の実態—張廷彦『支那語動字用法』と『動字分類大全』に基づいて—	許 辰晨 (261)
2019年月例会発表記録	(272)
編集後記	(274)
執筆者一覧	(275)
英文目録	(276)

構造で作る派生空間詞

On the Creation of Spatially Desired Locational Elements

高橋 弥守彦

TAKAHASHI Yasuhiko

提要 一般来说，处所词无需添加表示方向或位置的方位词即可表示处所。但事物名词和植物名词则需要借助方位词来表示其位置，比如“书上、桌子下”“树上、树林里”等。

随着词组学的深入研究，有观点认为，事物名词不借助方位词也可以表示处所。本文从词组学的观点出发，通过框架理论进一步阐明这一语言事实和理论，即：无需方位词的入，事物名词也可以表示处所。

キーワード：移動動詞 空間詞 連語論 意味変化 枠組み理論

目次

0. はじめに

1. 場所を表す単語と連語
2. 構造で作る派生空間詞
3. おわりに

0. はじめに

場所を表す単語はヒトが作れるものではなく、名付けられるだけである。“中国、日本、北京、池袋”などは、みなしかりである。モノ名詞などは場所性が何箇所かあるので、方位詞をつけることにより、どの場所（位置）なのかを明らかにし、モノなどにおける場所の特定化をはかる。たとえば、以下の文などである。

(1) 他在桌子上/下放了一个书包。(作例)

彼は机の上に/下にカバンを置いた。(筆者訳)

(2) 那年七月，我以五分之差，从通往大学的独木桥上栽落下来。(『人民』97-5-87)

その年の七月、僕は五点足りなくて、大学に通ずる丸木橋を滑り落ちてしまった。

(同上、97-5-86)

これまででは、モノ名詞や身体名詞などは方位詞をつけることにより場所性を出すという研

究りが盛んに行われてきた。連語論研究が進んでくると、構造から派生空間詞が論じられなければならないのではないかという考えが起こってきた。たとえば以下の例文である。

(3) 等我上了车, 一个女孩儿正跟我那朋友大吵。(『人民』90-6-98)

オレが乗ったら、子供っぽい娘が友達にくっつかかかっているところだった。(同上)

(4) 突然, 她下了讲台, 径直朝会场外走去。(『講読②』 p.109)

すると突然、彼女は演壇をおり、そのまま会場の外に消えてしまった。(同上、112)

(5) 那是进山烧窑的第一天, 他来窑时只扭头瞟了他一眼, 可就那一眼, 就把窑汉的魂勾去了。(『人民』93-3-111)

あれは、山に入って窯を焼きはじめた最初の日だった。女がここに来て、ふりかえってちらっと見たその流し目に、男は魂を奪われた。(同上、93-3-110)

(6) 她轻手轻脚出了门, 到了附近的张大妈家铺子前。(『人民』89-9-98)

ふとちょおばさんは、こっそり家の外に出て、近くの張おばさんがやっている店の前にやってきた。(『人民』89-9-99)

連語論の観点(「連語論的な意味」と「構造的なタイプ」)から見ると、例(3)“上了车”〔(バスに)乗ったら〕は「空間的な進入のむすびつき」、例(4)“下了讲台”〔演壇をおり〕は「空間的な離れのむすびつき」、例(5)“进山”〔山に入って〕は「空間的な進入のむすびつき」、例(6)“出门”〔筆者訳: ドアを出て(訳文: 家の外に出て)〕は「空間的な退出のむすびつき(「空間的な出現のむすびつき)」である。

例(5)の“山”は単語レベルで場所名詞だが、例(3)(4)(6)の“车、讲台、门”は単語レベルで見れば、ヒトが作るモノなので、モノ名詞である。しかし、連語レベル「動詞+名詞」で見れば、上掲に挙げる空間的な各むすびつきをつくることにより、これらの名詞は場所を表している。本稿では、連語のなかで、このように場所を表すことになる単語を派生空間詞と呼ぶ。それに対し、例(5)の“山”は単語レベルでも連語レベルでも場所を表している。本稿ではこのような場所を表す単語を基本空間詞という。

朱徳熙(1995:148)は場所を表す客語(目的語)を広義の場所目的語(例7)と狭義の場所目的語(例8)とに分けて、以下のような文を挙げて説明している。

(7) 我惦记着家里。[私は家のことを気に掛けている]

(8) 我坐在家里。[私は家にじっとしている]

朱徳熙によれば、例(7)(8)の連語“家里”は、いずれも場所目的語である。連語論の観

1) 朱徳熙(1995:148)は狭義の場所目的語を伴うことのできる動詞は数が限られていると指摘し、方向動詞“来、去、进、出、上、下、回”・移動を表す動詞“上、飞”・位置“在、到”を表す動詞の3類を挙げている。

点から見ると、これは選択連語“惦记着家里”“坐在家里”のなかで、前者は派生コト名詞連語、後者は派生空間詞連語に意味変化している。前者の“家里”はコト性であり、まったく場所性がないので、広義の場所目的語と言えるかどうか若干疑問である。後者は組織名詞と場所名詞を同一に扱っていた時代なので、やむを得ない解釈といえるだろう。

上掲の例(7)のモノ名詞“门”は、「空間的な各むすびつき」のなかで派生空間詞として扱われている。“门”は単語レベルではモノ名詞なので、モノ名詞として扱う典型的な例文であれば、一般には以下のように使われるであろう。

- (9) 真怪! 连着三天了, 妻子六点半起床, 丈夫就开门而入, 一分不差。(『人民』88-1-92)
 おかしい! 続けて三日になる、妻が六時半に起きると、すぐ夫がドアを開けて入って来るのだ。一分の狂いもない。(同上、88-1-93)

この例文であれば、行為を表す“开门”[ドアを開ける]の“门”は確かにモノ名詞として扱われている。“门”(例6)、“家里”(例7)を用いている上掲の例文から、名詞語句も連語の中で意味変化する場合があるといえる。

1. 場所を表す単語と連語

朱徳熙(1995:48)は、場所詞を以下のように定義付けている。

- 1) 場所詞とは“在、到”の客語となれる体詞
- 2) 場所詞とは“哪儿”を用いて疑問を發し、“这儿、那儿”を用いて代替することのできる体詞

朱徳熙(1995:48)はさらに場所詞を以下の3類に具体的に分けている。

- 1) 地名: 中国 亚洲 [アジア] 重庆 [重慶] 长安街 [長安街]
- 2) 「トコロ」とみなし得る機関²⁾: 学校 公园 [公園] 电影院 [映画館]
- 3) 合成方位詞: 上头 [うえ] 下边 [した] 背后 [うしろ側、裏側]

朱徳熙が挙げる場所詞は典型的な単語レベルの例であり、以下のように用いられる。これらの場所詞は、すでに場所性が明らかなので、そのあとに方位詞が用いられない場合のほうが多い。

- (10) “是嘞, 我住在圣地亚哥, 你学过地理吧, 智利, 在南美洲, 太平洋的彼岸, 离这里有一万多里地呢。”(『人民』93-6-111)
 「そうだよ、わしはサンチャゴに住んでるんだ。君は地理で勉強しただろう、チリ、南米の太平洋側にあって、五千キロ以上も離れてる」(同上)
- (11) 那天出差, 我来到北方一个陌生的小城市, 投宿在一家普通的旅馆。(『人民』94-6-93)

²⁾ 高橋弥守彦(2017:93)ではこれらの名詞を組織名詞としている。

その日私は出張で、北方の小さな見知らぬ町に着き、普通の旅館に宿をとった。

(同上、94-6-92)

- (12) 10 岁的儿子跟在他屁股后面。(『人民』94-5-93)

十歳になる息子が、そのうしろについています。(同上、94-5-92)

朱徳熙の挙げる地名(例10)、合成方位詞(例12)のあとであれば方位詞をつけることができない。しかし、機関(例11)の後であれば方位詞をつけることができる。なお、次の例文には、地名を表す固有名詞のあとであっても方位詞がつけられる。

- (13) 她们在长安街(上) 卖冰棍儿。(『实用』p. 54)

彼女たちは張安街でアイスクャンデーを売っています。(同上)

- (14) 我们这次访华团在北京外国语大学(里) 呆了三天。(『实用』p. 54)

今回の訪中団は北京外国語大学に三日間泊まりました。(同上)

上掲例文中の“长安街”(例13)は「アイスクャンデーを売る場所」、「北京外国语大学」(例14)は「泊まる場所」の意味として使われているので、方位詞を伴える。どういう場所なのかによっても、固有名詞に方位詞を伴える場合が出てくるので、中国語は単語レベルで例を挙げるよりも拡大選択連語(空間詞+動詞+名詞)や文レベルなどで例を挙げるほうが誤解を招かない。

このほかにも、朱徳熙(1995:51)は、方位詞の基本的用法は場所を表すことであるとし、単純方位詞と合成方位詞の2類を挙げている。このうちの単純方位詞はすべて付属形式であるとして、以下のような例を挙げている。

书上 [本の上、本の中] 桌子上 [机の上] 心里 [心の中] 屋里 [部屋の中]
树林里 [林の中] 孩子里 [子どもの中]

筆者の分類によれば、これらは「モノ名詞+単純方位詞」(“书上、桌子上、屋里”)、「カラダ名詞+単純方位詞」(“心里”)、「植物名詞+単純方位詞」(“树林里”)、「ヒト名詞+単純方位詞」(“孩子里”)に分けられる。これらに属する名詞を用いた実例を見ていこう。

- (15) 敏坐在沙发上，面前的茶几上摆着一杯很苦的咖啡。(『人民』95-4-99)

敏はソファにすわっていた。目の前の小テーブルには、濃いブラックコーヒーが置いてある。(同上)

- (16) 窑汉打得痛快淋漓，野狼不一会儿就躺在窑汉脚下。(『人民』93-3-111)

男は思い切りぶちのめし、狼はやがて足もとに倒れた。(同上)

- (17) 可现在，树上的眼睛依然深情地凝视着，而他俩却要分道扬镳，天各一方……(『人民』95-8-99)

今もその目は深い思いで凝視していたが、彼ら二人は別々の道を歩き、はるか離れ離れになろうとしている……(同上)

これらの実例であれば、いずれも朱徳熙の挙げる「モノ名詞+単純方位詞」(例 15 “沙发上、茶几上”)、「カラダ名詞+単純方位詞」(例 16 “脚下”)、「植物名詞+単純方位詞」(例 17 “树上”)であり、朱徳熙の言うように、単純方位詞はすべて付属形式である。しかし、上掲にあげる“屋里”は、次の例文では、そのあとに方位詞がなくても、“屋”“門”などは場所を表している。

(18) 这个矮墩墩的小伙子进了屋，便从大竹篮里提出一瓶通州大曲，一包用荷叶托着的熟驴肉。(『講読②』 p. 9)

このずんぐりした若者は、部屋に入るなり、大きな竹かごから「通州大曲」の酒を一瓶、それに蓮の葉でつまれたロバ肉を一包み取り出した。(同上、p. 14)

(19) “你说，我进门时怎么叫？”(『講読③』 p. 71)

「ねえ、あなた、家に着いたら、わたし、なんて呼ぶの？」(同上、p. 78)

(20) 上了大桥，我出了一身汗。(『講読⑥』 p. 9)

橋の上にのぼると、私はもう汗びっしょりだった。(同上、p. 15)

例 (18) の“进了屋”は“屋”を使っているが、そのあとに方位詞“里”を用いていない。

(19) の“进门”の“門”、(20) の“上了大桥”の“(大) 橋”は、いずれもモノ名詞またはモノ名詞で作る連語だが、そのあとに方位詞を用いていない。この 3 例から主体の移動を表す連語は、方位詞を用いなくても場所を表せる³⁾と言える。以下では、構造で作る空間詞があることを明らかにする。

2. 構造で作る派生空間詞

中国語では、一般に名詞や代詞などの体言性の語句は主語や客語になり、動詞や形容詞などの用言性の語句は述語になる。しかし、体言性の語句が述語になり、用言性の語句が主語や客語になる場合もある。筆者はこれを枠組み理論⁴⁾により、なぜこの言語事実が可能になるのかを明らかにしている。以下の例文で分析してみよう。

(21) 他追求过小萍。(『人民』 93-1-111)

だって彼は、小萍にひかれていたのよ。(同上、93-1-110)

(22) 中年男人嘿嘿笑了，连说，有门儿有门儿。(『人民』 93-11-111)

中年男はへへと笑い、立て続けに言った、やれる、やれる。(同上、93-11-110)

(23) 新年将至，他却没有快乐。(『人民』 93-2-111)

³⁾ 朱徳熙 (1995:148) も方向動詞“来、去、进、出、上、下、回”は狭義の場所目的語を伴うことができる、と指摘している。しかし、これらは言語事実からの指摘であり、連語論の観点はまだ導入されていない。

⁴⁾ 高橋弥守彦 (2011: 1~14) では、先行研究と例文とにより、枠組み理論に基づき、名詞や名詞連語が述語になり、動詞や形容詞およびそれらを核とする連語が主語や客語になれるのかを明らかにしている。

新年早々というのに、彼はたのしくなかった。(同上、93-2-110)

例 (21) は代詞“他”が主語となり、固有名詞“小萍”が客語となっている。(22) は動詞“笑”が述語となり、(23) は形容詞“快乐”が述語となっている。いずれも基本的な文型である。しかし、以下の文はいずれもこの原則から外れている。なぜこれらの文が成立するのかを検討してみよう。

(24) 罗泽 32 岁，很有男子汉风度。(『人民』93-1-111)

羅は三十二歳、男らしいなかなかの風采だ。(同上、93-1-110)

(25) 会后，矿长单独召见了苗秀，并告诉他，矿里将对他提出的问题进一步深入调查、核实。(『人民』93-5-111)

座談会のあと、鉱山長は単独で苗秀と会い、君が言った問題について突っ込んだ調査を行うであろう、と告げました。(同上、93-5-110)

(26) 同事们也分别向他回报以微笑。微笑充满了温馨。(『人民』93-2-111)

みなもそれぞれに、微笑でこたえてくれて、その微笑にはあたたかさがこもっていた。(同上、93-2-110)

(27) “你说，我吃的三付药是不是燕先生的？”(『人民』94-2-93)

「君、ぼくがのんだ三服の薬は、燕先生の薬なのではないか、え？」(同上)

(28) 儿子说：“有一条路是我踩出来的。”(『人民』94-5-93)

「その一本は、ぼくがつくったんだよ」と息子が言いました。(同上)

(29) 嗨，这算什么，小萍没看上他，并不意味他配不上她。(『人民』93-1-111)

まあ！そんなことぐらいなによ、小萍に振られたからといって、羅さんが小萍より劣っていたわけじゃないのに。(同上、93-1-110)

例 (24) は体言性の連語“32 岁”が述語に、(25) は用言性の 2 つの動詞“调查、核实”が客語に、(26) は形容詞“温馨”が客語になっている。(27) は名詞連語“我吃的三付药”、(28) は選択 (VN) 連語“有一条路”がそれぞれ主語となり、(29) は説明 (NVN: 文形式) 連語“他配不上她”が客語になっている⁵⁾。これらの単語や連語は、文を構成し分析する本来の機能と異なっている。

これらの文が成立するのは、例 (21) (22) (23) のように、名詞や代詞が主語や客語になり、動詞や形容詞が述語になる文の組立と分析の理論があるからである。この理論があるので、主語や客語の位置に動詞や形容詞が用いられても、動詞は動詞、形容詞は形容詞だが、枠組みの作る機能により、これらに体言性の意味が加わり、文が構成される。同様に述語の

⁵⁾ 名詞や代詞が述語になり、動詞や形容詞が主語や客語になるのは、張志公の「名物化」、朱徳熙の「本能説」、沈家煊の「包含理論」「包含模式理論」などで説明されてきた。これは単語レベルでは、このように言っても、(28) (29) (30) のような連語レベルになると説明ができない。筆者は枠組み理論によって、これらを説明している。

位置に体言性の語句が用いられても、述語の位置に用いられることにより、用言性の意味が加味される。これが粹組み理論であり、形態変化のない言語の特徴である。以下では実例により、連語論の観点から、この粹組み理論を運用して連語を分析してみよう。

- (30) 在和那女孩的一次长吻后,陶理激情地说为了女孩子可上九天揽月…… (『人民』93-11-111)

彼女と初めて長い口づけをかわしたあと、激情に駆られて言った。あなたのためならば、九天の高みに上って月をもとって参りましょう…………… (『人民』93-11-110)

- (31) 我也该上路了, 于是熄灭火塘, 归置好东西, 把门别上。(『講読③』 p.42)

私も出立しなければならぬ。そこでいろいろの火を消し、ものを元の所にもどし、門を元通りに閉めた。(同上、p.46)

- (32) 上楼的时候, 孩子说:“现在要是有一锅甜粥, 我能一气把它吃光。” (『人民』88-2-98)

階段を上がりながら、子供が言った。「甘いおかゆがナベいっぱいあれば、ペロリとたいらげちゃうんだけどな」(同上、88-2-99)

- (33) 陈小手接过来, 看也不看, 装进口袋里, 洗洗手, 喝一杯热茶, 道一声“得罪”, 出门上马。(『講読②』 p.97)

陳小手はそれを受け取り、見もしないで、ポケットにねじこみ、手を洗い、熱いお茶を一杯飲み、「失礼します」と一声かけて、門を出て馬上の人となる。(同上、p.104)

- (34) 孤独感猛然漫溢上心头, 一瞬间竟那么强烈, 简直无法抑制。(『講読④』 p.74)

孤独感が急に胸にこみあげたかと思うと、それはまったくおさえ切れないものとなった。(同上、p.80)

- (35) “是呀, 您不是说过, 他的转变, 上了报纸, 增添了您工作上的信心?” (『講読⑥』 p.110)

「そうよ、お母さん言ったでしょう。あの人はなかつた、新聞にもものつたし、お母さんはそれで自分の仕事に自信ができた。」と。(同上、p.115)

例(30)“上九天”[九天の高みに上って]の“九天”、(31)“上路”[出立する]の“路”はいずれも空間詞であり、これらを基本空間詞という。連語論の観点から見ると、前者は「空間的な到着のむすびつき」、後者は「空間的な進入のむすびつき」である。

例(32)“上楼”[階段を上がる]の“楼”はモノ名詞、(33)“上马”[馬上の人となる(馬に乗る)]の“马”はヒト(動物)名詞⁶⁾、例(34)“上心头”[胸にこみあげる]の“心头”はカラダ名詞、例(35)“上了报纸”[新聞にもものつたし]の“报纸”はモノ名詞だが、VN連

⁶⁾ 鈴木康之(2011:30)では、場所名詞について「それに対して、空間的な通過のむすびつきでは、『税関を(とおる)』『ゴールラインを(こえる)』のように、空間性のとぼしい場所名詞でもかまわない」と述べている。これは「空間的な通過のむすびつき」だけではなく、他のむすびつきにも言える。

語の中では派生空間詞として空間⁷⁾を表し、それぞれ「空間的な移動のむすびつき」(例 32)、「空間的な到着のむすびつき」(例 33)、「空間的な出現のむすびつき」(例 34, 35)を作っている。

以下では、“上”以外の位置移動の動詞を用いている文も挙げて分析・検討してみよう。先ず、位置移動の動詞“下”で作る連語を分析してみよう。

(36) 我和科室小张要下乡作调查。(『人民』18-6-69)

私と分室の張さんは農村に実地調査に出かけた。(同上、18-6-68)

(37) 突然，她下了讲台，径直朝会场外走去。(『講読②』 p. 109)

すると突然、彼女は演壇をおり、そのまま会場の外に消えてしまった。(同上、p. 112)

(38) 他下了马，即刻进了产房。过了一会儿(有时时间颇长)，听到“哇”的一声，孩子落地了。(『講読②』 p. 96)

彼が馬から下りるとすぐ産室に入り、しばらくして(ときには相当長い時間をへて)、おぎゃあという産声とともに、赤ん坊が生まれる。(同上、p. 104)

例 (36) “下乡”[農村へ行く]の“乡”は単語レベルで見れば組織名詞、(37) “下了讲台”[演壇をおり]の“讲台”はモノ名詞、(38) “下了马”[馬から下りる]の“马”はヒト名詞(動物も人に含まれる)である。(36) (37) (38) の各名詞は連語の中で場所を表すので、派生空間詞といえる。(36) は「空間的な移りのむすびつき」、(37) (38) はともに「空間的な離れのむすびつき」である。次に、“進”で作る連語を分析してみよう。

(39) 那是进山烧窑的第一天，他来窑时只扭头瞟了他一眼，可就那一眼，就把窑汉的魂勾去了。(『人民』93-3-111)

あれは、山に入って窯を焼きはじめた最初の日だった。女がここに来て、ふりかえってちらっと見たその流し目に、男は魂を奪われた。(同上、93-3-110)

(40) 进检票口，才发现自己还没有买站台票。(『講読⑤』 p. 98)

改札口に入りかかって、入場券をまだ買っていないのに気づいた。(同上、p. 108)

(41) 第三局，下到得意处，小李一扫初进门时的拘谨，竟然拍起厂长的肩膀来，“老兄，十步之内，解决战斗。”(『講読①』 p. 38)

小李は、第三局目も優勢にもちこむと、この部屋に入ってきた時のかしこまっていた態度をかなぐり捨て、なんと工場長の肩をたたいて、「兄貴、あと十手以内でかたがつきますよ」と言っただけ。(同上、p. 42)

⁷⁾ 例 (31) から (36) までの各連語は、空間的な各むすびつきとなる。たとえ「動詞+名詞」の名詞の位置に場所詞(例 31, 32)以外のモノ名詞(例 33, 36)、動物名詞(例 34)、カラダ名詞(例 35)が用いられていても、連語論的な意味により、連語の中では場所を表している。

例 (39) “进山” [山に入る] の“山” は基本空間詞だが、(40) “进检票口” [改札口に入る] の“检票口”、(41) “进门” [部屋に入る]⁸⁾ の“门” は単語レベルで見れば、ともにモノ名詞だが、連語の中では場所を表しているので派生空間詞である。連語論の観点から見れば、例 (39) は「空間的な進入のむすびつき」、(40) (41) も「空間的な進入のむすびつき」である。三番目に、位置移動の動詞“出”で作る連語を分析してみよう。

(42) 她从没出过北京。《《汉语常用词用法词典》 p. 82)

彼女はこれまで北京を出たことがない。(筆者訳)

(43) 陈小手出了天王寺，跨上马。《『講読②』 p. 100)

陳小手は天王寺を出ると、馬に飛び乗った。(同上、p. 105)

(44) 她心里平静多了，将钱塞进婆婆布枕下，端起盆儿出了门。《『人民』 91-4-97)

彼女は気持ちはずっと楽になった。お金をしゅうとめの布枕の下に押し込むと、おまるを持って外に出た。(同上)

例 (42) “出过北京” [北京を出たことがある] の“北京” は基本空間詞だが、(43) “出了天王寺” [天王寺を出る] の“天王寺” は単語レベルで見れば組織名詞、(44) “出了门” [外に出た]⁹⁾ の“门” は単語レベルで見ればモノ名詞である。(43) (44) のこれらの名詞は連語の中では場所を表するので、派生空間詞といえる。連語論の観点から見れば、例 (42) は「空間的な退出のむすびつき」、(43) (44) も「空間的な退出のむすびつき」である。

4 番目に「有様移動の動詞+空間詞+位置移動の動詞+趨向移動の動詞」で作る連語を見てみよう。

(45) 他走上楼来 (我的房间) 了。(作例)

彼は階段を歩いてあがって(私の部屋に) きた。(筆者訳)

(46) 这孩子爬上桌子来了。《《用法词典》 p.625)

この子は机によじ上ってきた。(筆者訳)

(47) 它要是高兴，能比谁都温柔可亲：用身子蹭你的腿，把脖儿伸出来让你给它抓痒，或是在你写作的时候，跳上桌来，在稿纸上彩印几朵小梅花。《『人民』 15-8-68)

機嫌がいいときには、誰よりもおとなしく人懐っこい。体をあなたの足にこすりつけ、首を伸ばして、痒いところを搔いてもらい、あるいはあなたが書き物をしているときなんかは、机の上に飛び乗って来て、原稿用紙の上に桜印を残す。(同上)

例 (45) “走上楼来 (我的房间)” [階段を歩いてあがって (私の部屋に) くる] の“楼”、(46) “爬上桌子来” [机によじ上ってくる] の“桌子”、(47) “跳上桌来” [机の上に飛び乗

⁸⁾ 中国語は実質視点“进门”で表現するが、日本語は [門に入る] ではなく、場面に応じて訳す話題表現 [部屋に入る] なので、日本語への翻訳にはかなりの注意が必要である。

⁹⁾ “出了门”は「空間的な出現のむすびつき」の訳 [外に出た] ではなく、「空間的な退出のむすびつき」なので、[ドアを出た] と訳すほうがいだろう。

って来て]の“桌”は単語レベルで見れば、いずれもモノ名詞である。これらの名詞は連語の中で場所を表すので、すべて派生空間詞¹⁰⁾といえる。これらの名詞の意味変化を枠組み理論という。これが形態変化をもたない言語の特徴である。連語論の観点から見れば、(45) (46) (47) もいずれも「空間的な移動のむすびつき」である。

3. おわりに

一般に単語レベルで場所を表せる固有名詞や方位詞などの空間詞は、単語レベルですでに場所を表しているので、方角や位置を表す方位詞を用いることができない。しかし、モノ名詞やコト名詞などは、組み合わせる語句により、場所を表す必要性があれば、方位詞を用いる。それにより、モノやコトにおける位置の特定化を表し、どの場所で行う動作や行為なのかを明らかにする。そのためにモノ名詞などに方位詞が用いられる。

移動を表す連語であれば、移動動詞の対象は一般的には空間詞である。移動動詞の対象は基本的には空間詞なので、空間詞の位置に、たとえモノ名詞やコト名詞が用いられていても、空間領域のくみあわせの中で、派生空間詞として、空間を表すことができる。空間領域のくみあわせを連語論的な意味と構造的なタイプで分析しても、モノ名詞やコト名詞はやはり場所を表している。これは枠組み理論によっても証明することができる。

言語資料

1. 『人民中国』ショートショート 人民中国雑誌社 1988～1997
2. 『中国語学講読シリーズ』①～⑥ 北京外文出版社 1991
3. 『人民中国』楽しく対訳 人民中国雑誌社 2014～2017
4. 『白水社中国語辞典』伊地智善継編 白水社 2002
5. 《汉语常用词用法词典》李晓琪等編 北京大学出版社 1997
6. 《现代汉语动词例释》黄传江 陈小盟 主编 背景师范大学出版社 2011

参考文献

日本語文献

1. 荒川清秀 (2015) 『動詞を中心にした中国語文法論集』白帝社
2. 鈴木康之 (2000) 『日本語学の常識』海山文化研究所
3. 鈴木康之 (2011) 『現代日本語の連語論』日本語文法研究会
4. 島村典子 (2016) 『現代中国語の移動を表す述補構造に関する研究』好文出版
5. 朱德熙著 杉村博文・木村英樹訳 (1995) 『文法講義』白帝社
6. 高橋弥守彦 (2001) 「動補連語“走出来”について」『外国語学研究』第2号

¹⁰⁾ 筆者が収集した実例の中には、基本空間詞を使っている例文がなかったので、作例を挙げてみる。“他走上山来了。”[彼は歩いて山をのぼってきた。]の“走上山”は[空間的な移動のむすびつき]であり、“山”は単語レベルでも連語レベルでも空間を表すので、基本空間詞である。

7. 高橋弥守彦 (2006) 『实用詳解中国語文法』 郁文堂
8. 高橋弥守彦 (2008) 「“上”と客体との関係について」『外国語学研究第』9号
9. 高橋弥守彦 (2016) 「連語論から見る“动词+上来/去”と客体との関係について」『研究会報告』第38号 日本語文法研究会
10. 高橋弥守彦 (2017) 「“(动态动词) 上+来/去”と客体との関係について」『大東文化大学紀要』第55号 大東文化大学
11. 丸尾誠 (2005) 『現代中国語の空間移動表現に関する研究』 白帝社
12. 李臨定著／宮田一郎訳 (1993) 『中国語文法概論』 光生館
13. 呂叔湘主編 牛島徳次監訳 菱沼透訳 (1992) 『中国語用例辞典』 東方書店

中国語文献

1. 丁崇明 (2009) 《现代汉语语法教程》 北京大学出版社
2. 耿二岭 (2010) 《汉语语法》 北京语言大学出版社
3. 刘月华 主编 (1998) 《趋向补语通释》 北京语言大学出版社
4. 卢福波 (2011) 《对外汉语教学实用语法》 北京语言大学出版社
5. 陆庆和 (2006) 《实用对外汉语教学语法》 北京大学出版社
6. 单宝顺 (2011) 《现代汉语处所宾语研究》 中社会科学出版社
7. 杨德峰 (2004) 《汉语的结构和句子研究》 教育科学出版社